

書評

はじめての医学 ▶ 木南 凌 著

はじめての医学／木南 凌 著／メディカル・サイエンス・インターナショナル 2019／B5判変型 224ページ 定価2,500円＋税

新潟大学医学部生化学の教授を長きにわたり務められた木南凌先生が、「医学部1年生の医学概論の教科書となるように」と執筆されたのが本書だ。が、開いてみて驚いた。「構造式がどこにもない！」のだ。実は木南凌先生は、私が医学部学生時代に生化学の講義や実習でお世話になった先生である。講義では、あれほど構造式の大切さを説かれていた木南先生が、構造式のない教科書を書かれたということは、そこには先生の特別な思いが込められているに違いない。

本書は19章からなり、各々の章のタイトルは、「核酸の構造」とか「解糖系」とかではなく、「どうして見えにくくなるのか、緑内障」とか、「貧血になると、どうして立ちくらみが起こりやすくなるのか」などである。一般人にとっても分かりやすい表現で、幅広い疾患が取り上げられている。各章を読み進むと、分かりやすいタイトルや文章とは裏腹に、明解なイラストを伴った細かく、正確な解説がなされているのである（正直申しあげて、私が知らないことも結構書かれており、読んでいて冷や汗ものであった）。章の内容に関連して患者さんが「症例」として紹介されているが、詳細な検査結果などを記した典型的な症例紹介ではなく、あくまでも患者さんの訴え（主訴）と、簡単な所見の記載による患者さんの紹介である。これらは恐らく意図的に行われたもので、医学部に合格あるいは入学したばかりの医学生、医学へのモチベーションを高めるために、あえてとっつきやすい記載にしているのだと感じた（構造式を入れなかったのも、この段階で生化学に嫌悪感を持ってもらっては困るという、「生化学」への木南

先生の思いが込められているに違いない）。

「症例」に加えて、1ページに1つくらいの割合で「メモ」が記載されている。「器官と臓器ってどう違う？」というメモでは、「実は英語だとどちらもorganで、同じです」とあり、「代謝が活発になると、どうしてイライラするの？」というメモでは、「分かりません」とあって、読んでずっこけてしまった。しかしながら、この正直で親近感の湧く「メモ」の解説も、後半に進むにつれて、きちんと専門性をもった解説になっていく。本書は、読みはじめは極めてとっつきやすく、読み進めていくと自然に高度なレベルの解説を読めるようになるのである。本全体の構成が、実に熟考された、恐るべき医学の入門書なのだ。また、書かれた内容に飽き足りない読者のためには、「詳しく知りたい」というコラムで、さらに詳細な解説や発見の裏話が披露されており、興味深く読み進めることができた。

私も医学部の教官として1年生から医学教育に携わり、生物を履修していない医学生や、そもそも医学に興味があるのかどうか、疑問を感じる医学生の対応に苦慮することも多い。厳しい受験勉強を経てめでたく医学部に入学した学生の視線を、本来の目的である「医学」に向けることができる教科書はこれまで存在せず、本書はその先駆となることが期待される（医学関連の「ブルーバックス」本は散見されるが、ほとんどは著者の専門の周辺領域の解説本となっており、本書のように、幅広い疾患を解説したものは異なる。そういった意味で本書は立派な「教科書」である）。医学部1年生に加えて、看護学科、保健学科、薬学部6年生コースの学生、そして医学部の新米教官に対しても、良いイントロダクションとしてお勧めできる良書であると感じた。

（横溝岳彦 順天堂大学医学部生化学第一講座）